2016年1月・季刊52号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館　松居友

ミンダナオ子ども図書館の支援は、
ほぼ90％が、
個人の方々のご寄付でなりたっています。
奨学金は、一人の奨学生に、
一人の支援者がついてくださいます。
支援者の方が現地に来られると
その子の家にお連れします。
子どもたちにとっては、
学校に行かせてもらえることが、
奇跡に等しく、
まるで第二の父親か母親に会ったように
抱きついて、時には泣いて迎えてくれます。
ミンダナオ子ども図書館は、
支援者の方々を家族としてお迎えするので
宿泊費もとらず、
ダバオでもオフィスに泊まれますし
ダバオ空港までお迎えにいっています。
自由寄付は、大勢の子どもたちの医療
生活や食費や活動費に使われる重要な寄付です。
カンパのように、
思いついたときに思いついた額を
振り込んでいただければ幸いです。
相変わらずの円安で
一度下げた子どもたちの小遣いの額を
まだ、元に戻すことができません。
支援者を見つけるためにも、
松居友が、講演会をこなしているのですが、
お声をかけていただければ、
家庭集会でもうかがいます。
今後とも長く、よろしくお願いいたします。

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

思った以上に日本の子どもたちの感性は素晴らしい　松居友

日本での講演会が、今まで多かった幼稚園の母親から、大学、高校、中学、そして小学校にも広がっていきはじめた。

いろいろな心理的な問題や生活不安、家族関係での孤独を感じている子も多く、自殺率も世界でも最高の国だと聞いている。しかし講演での印象では、幼い子も含めて心から耳を傾け、感動してくれる。ミンダナオの子どもたちの「困難の中でも生きる力を失わない」様子を映像で見せて、友情と愛こそが生きる力であることを理解し、涙ぐむ子たちも多い。

思った以上に、日本の子どもたち、若者たちの感性は素晴らしい。問題は、それをとりまく社会的環境、とりわけ遊びの中で友情を培う「ちまた」が存在しないことだろう。

来年はミンダナオの総選挙があり、6月までは訪問者をストップするけれども、そのあいだに、海のMCLも含めて、将来の日本の子どもたち若者たちを受け入れて、現地の子たちと友情と愛を結べる場を作るための計画を進めていこう。

小鳥狩りの一日

宮木　梓

明日までに、季刊誌に載せる原稿を書かなければならないのに、私は絵本を作っている。

原画をカラーコピーしたものを、一枚一枚糊で貼り合わせ、四隅を切り落として紙の大きさをそろえ、糸で縫い綴じて、お話を書き込んでいく。今日中に、全部できるだろうか。できれば、今晩みんなに配りたい。きっかけは、MCLに来る前に訪ねた、ラオスのルアンパバンのナイトマーケットで買った、一冊の絵本だった。

値段を決める駆け引きはナイトマーケットの楽しみでもあるけれど、山岳民族のモン族の少女が売っていたその絵本を、言い値で買った。たった6ページの小さな絵本。

赤い布に、モンの民族衣装を着た家族の働く姿が刺繍してあり、絵の上に英語で、下にラオ語でお話がついている。少女は刺繍をするのに、どのくらいの時間をかけたのだろうか。

マノボ族のスタッフに、小鳥狩りの話をしてもらったときに、同じような絵本を作ってみたい、と思った。

MCLにいるマノボの子どもたちは、日常あまりマノボ語を使わず、ビサヤ語で話をする。ムスリムの子どもたちが、同じ民族どうしではマギンダナオ語に切り替えるのとは、対照的だ。自分たちのことばで、自分たちの暮らしを描いた絵本があれば、どんなにいいだろう。フィリピンの本屋さんでは、英語やタガログ語の物語は置いてあっても、ビサヤ語の物語すら見かけない。マノボ語で、山の生活を描いた絵本を作ってみたかった。

そうしてできた「小鳥狩りの一日」は、とてもシンプルな物語だ。

夏のある日、男の子がお父さんに、「明日、小鳥狩りに行くぞ」と言われる。

こちらで「夏」と呼ばれるのは4月～5月、乾季の最中の雨がほとんど降らない、とても暑い季節だ。少なくなった水場に集まる小鳥を狙って罠をしかける。男の子にとって、初めての小鳥狩り。彼は、お父さんに狩りに連れて行ってもらえることが、とてもうれしい。

次の日、男の子は早起きして、キャッサバ芋やサツマイモのお弁当を準備する。山の人たちは、普段お米をあまり食べない。そして、お父さんと水牛に乗って、水場まで出かける。狩場で、お父さんを手伝いながら、罠の作り方や仕掛け方、仕掛ける場所を教えてもらい、お昼ごはんの後は大きな木の下で休憩する。夕方までに、何百羽という小鳥が捕まった。

お話をしてくれたスタッフに、この「何百羽」というのは「たくさん」という意味でなくて、本当に「何百羽」なの？と聞くと、そうだ、と言う。その何百羽の小鳥の収穫と一緒に水牛に乗って、お父さんと家路につく。家では、お母さんと弟、妹たちが、バナナや里芋などのおやつを準備して、お父さんとお兄さんが、たくさんの小鳥を採って帰ってくるのを待っている。

二人が家に戻ると、さっそくお母さんは、小鳥をさばいて夕ご飯の支度に

とりかかる。電気が無いので、日の沈む前に料理する。そして、家族みんなで小鳥料理をお腹いっぱい食べて、幸せな気持ちで布団に入る。男の子は、来年も小鳥狩りに行きたいなぁ、と思って、お話は終わる。

お話を10の場面に分けて、表紙と背表紙を入れて、12枚の画用紙を準備した。裏にマノボ語と簡単な英訳を入れて、子どもたちに渡す。

焼き畑民族のマノボは、男女で仕事の役割がはっきりと分かれていて、狩りは男性の仕事だというので、絵を男の子たちに描いてもらうことにした。

お話をしてくれたスタッフに、子どもたちに説明して、画用紙の裏に書いてある場面の絵を描いてもらうように頼む。何日か経って、子どもたちが完成した絵を持ってきてくれた。それぞれの子の見てきた風景が、想像できるようだ。

マノボの子の描く風景は、背後に大きな山々があって、空に黄色い太陽が昇り、手前には田んぼがあって、人や動物は小さく描かれている。マノボ語も英語も分からなかった子は、晩ごはんを作るシーンに、狩りのシーンを描いている。

マノボの子は、「小鳥狩り」を知っていて、狩りのシーンに罠を仕掛けた森を描いているけれど、ムスリムの子の描いた絵にはライオンと象がいるし、ビサヤの子が描いた狩りは、銃を使っている。

揃った原画をコピーして綴じ、後はお話を書き込めば完成だ。

手作りの絵本だから、主人公の名前に、自分の好きな名前を入れられるよ、と言うと、「ミカエル」や「マーティン」を主人公にして、と頼んだ子もいたけれど、試作を見たらみんなが、やっぱり自分の名前がいい、と言った。絵を描いてくれた男の子たちの名前のつづりを確認し、主人公を本人の名前に変えて、お話を入れていく。一冊一冊仕上げていきながら、私はふいに、あ、と思い、胸が詰まった。絵を描いてくれた子たちのなかで、両親の揃っている子はほとんどいない。

その子の名前を物語に入れながら、MCLに来た背景が思い浮かぶ。両親が殺され、自分も撃たれて病院にいた子、家族で山からキダパワンの町に仕事を求めて出てきたものの、小学2年生の時に両親とも病気で亡くなり、学校に行けていなかった子、お父さんが亡くなり、お母さんが精神を病んでしまった子、お母さんが亡くなりお父さんが再婚して寂しい子、両親が揃っていても、満足に食べることができない家から来た子…。

そんな子どもたちが、このお話のなかでは、お父さんと狩りに行き、お母さんと弟妹が待っている家に帰り、お腹いっぱい食べて眠る。それは、当たり前なように見えて、とても幸せな物語に思えた。

晩ごはんの後、出来上がった絵本を渡しに行く。ページを開いて、主人公の名前を確認しながら、一人ひとりに手渡していく。

イロカノ族の男の子が、「ビサヤ語はないの？マノボ語、分からないよ」と言うので、「ないよ、マノボ語で考えたお話だからね」と答える。ムスリムの男の子が、「これ、読み語りの時に持っていきたいなぁ」と言っているのが聞こえてうれしくなる。きっと、日本語や英語の絵本をマギンダナオで語るように、マノボ語の絵本も、マギンダナオ語で語るのだろう。マノボの高校生のお兄さんは、絵本を読んで、ビサヤやムスリムの子にも分かるように、ビサヤ語で語り始めた。

小学生のマノボの男の子が、ベッドに寝っ転がって、たどたどしく、もらった絵本を朗読している。私の支援している奨学生だ。

家族と離れて暮らしている彼に、私は両親のようにマノボの狩りの方法や畑仕事、伝統的な踊りや歌を教えてあげることはできない。だけど、彼のことばで書かれた絵本を贈ることができた。どこにも売っていない、自分たちのための物語。私と彼は、普段ビサヤ語で話をする。でも、今度、彼にマノボ語でお話を語ってもらおう、と夢見る。

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、
メール mclmindanao@gmail.com（日本人現地スタッフ、宮木梓〈あずさ〉さんに！
Ｆａｘ 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）

日本での連続講演をこなして
ミンダナオに帰ってきた

松居　友

ミンダナオ子ども図書館に帰ったとたん、子どもたちが大声で叫びながら駆けよってきた。

「帰ってきたよ！」

「パパ友が、かえってきたーーー！」

そして、次から次へと抱きついてくる。

同行された訪問者の山本さま御兄弟も、子どもたちの明るい笑顔と表情に驚かれたようす。

タモガンの慰霊碑の前で

７０歳代前後のお二人は、おじさんが戦前にダバオでマニラ麻を作っていた太田興業に所属されていた。しかし、世界大戦が勃発。徴兵されて日本軍とともに、カリナンの奥のタモガンのジャングルに逃げこんで亡くなられ、その慰霊のために、お二人は来られたのだった。

以前にも、ダバオで生まれ、少女時代に日本軍といっしょに、やはりタモガンに逃れた姉妹が来られた。その方もおっしゃっておられたけれど、現地の人たちよりも日本兵の方が怖かったそうだ。

現地でマノボ族と平和に暮らしていた人たちは、戦争を複雑にとらえていた人が多いと聞く。おそらく山本さんのおじさんも、同じ思いだったのではないだろうか。

ミンダナオ子ども図書館のスタッフのジケロくんも、おじいさんが太田興業の関係でカリナンでマニラ麻を栽培していた。しかし、戦争になり、おじいさんは戦争を避けて、まだ小さな彼のお父さんを背中におんぶして、バゴボ族の妻と一緒にジャングルのなかを逃げまわったという。

ミンダナオ子ども図書館の奨学生には、そうした日系人の子たちも多い。彼らは、ジャングルに逃げた後、自分が日本人の末裔であることをひた隠しにして、先住民として生き延びた。ぼくもときどき耳元でそっと声をかけられることがある。

「実は、わたしのお祖父さんは、日本人・・・」

実は、ぼくの叔父、父の兄もフィリピンのルソン島で戦死していて、なぜかミンダナオにいると、しばしばその叔父の事を思い浮かべる。

会ったことはないのだけれど、父の話に聞くところでは、性格も良く勉強も出来て医師になった。ところが世界大戦が勃発して、軍医としてフィリピンに派遣されたけれども、スペイン語も出来て、現地の女性たちにもてたそうだ。

タモガンの子供たちと

ぼくが思うのは、その叔父が戦争でジャングルを巡りながら、おそらく現地の子どもたちにも出会ったに違いなく、こちらの明るい子どもたちを見ながら、なんでこんな馬鹿げた戦争をしなければならないのだろう、と思ったに違いないと言う事だ。

ぼくが、ミンダナオ子ども図書館をはじめたきっかけは、イスラム地域での戦争で、１００万を超す避難民が出ていて、特に子どもたちの笑顔が消えてしまっていることに心を痛めたから

日本兵が隠れた洞窟のまえで

だったが、ミンダナオ子ども図書館の活動を始めてから、しばしばその叔父のことを考えるようになった。

死んだ叔父がぼくの前に立ち、この仕事を導いているような気がする時があるのだ。

ミンダナオ子ども図書館が活動している、アポ山周辺からイスラム地域のリグアサン湿原にかけての一帯は、共産ゲリラと呼ばれるＮＰＡとイスラム反政府組織とよばれるＭＩＬＦの活動地域だ。

たまに、司令官を紹介されることがあるけれども、（池上彰さんの番組で、カバサラン村に読み語りに行くときに、突然ぼくだけが離れて別行動をとり、撮影が中断されたけれども、あれも北コタバト州のＭＩＬＦの最高司令官に挨拶に行ったからだ。

「やあやあひさしぶり、君たちのことは知っているよ。いつもありがとう。」それだけだった。）

ミンダナオ子ども図書館は、子どもたちへの愛でのみ動き、非政治で特定の宗派のもとでは、行動しないという指針をもっているけれども、政治や宗教をしっかりと受け止めて意識しながら細心の注意を払って活動している。

そとからは、イスラムゲリラや共産ゲリラと呼ばれている方々も、普通の人々だと思うのだけれど、そのなかに日本人の血を受けついだ人々が、けっこう混じっていて、いま、こうした人々が心配しているのは、現在進行中の日本主導による和平交渉が決裂して、もしもミンダナオで大きな戦争が起こったら、フィリピン政府軍とアメリカ軍とともに、すでに合同演習を開始している日本軍（自衛隊のことをこちらでは日本軍と呼んでいる）が、集団的自衛権を建前に、攻めてくるのではないかという事だ。

支援活動による和平構築が、高く評価されてはいるものの、現地では、過去の日本軍の残虐行為が今でも語られ続けているだけに、人々は新たな恐怖を感じているようだ。

もし戦争で、日本軍が攻めてきても、ぼくは君たちを助けにいくからね、と子どもたちには話しているけど、戦争ほど馬鹿げた行為はないと思う。

イエスの言葉を思いだす。

「武器を持つな。剣を持つものは剣で滅びる。」

今回は、それいがいにも4歳の時にペールーから母子で日本に来て、混沌とした成長期を過ごしてきた20歳の双子の若者と、女性が同行した。

さあ、しゅっぱーーつ！

言葉が通じなくても、心が通じる

キアタウの子供たちとジャングルをくだる

わーっ、こんな所を降りていくんだ。すっげー！

講演会、報告会、家庭集会の以来は、松居友へ
mcltomo@yahoo.co.jp（松居友へメール）
電話番号：080-4423-2998（日本国内から現地に転送・松居友）
09219603640（現地携帯電話フィリピン使用・松居友）

この双子の若者は、日本語以外に英語もほとんどしゃべれない。中2で学校をストップしたから。でも、見ていると子どもが大好きで、友情を培う力がすばらしい！

前にも、父親が中華系で苦労して育ち、やはり英語があまりしゃべれない若者が来たけれども、性格が良く、たちまち子どもたちと親しくなっていった。ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、友情と愛をはぐくむ感性がすばらしく、言葉がつながらなくても心が通じて、相手の気持ちをすぐに察して、たちまち親友になっていく。

でも、やはり心が通じるだけではなく、言葉も通じる方が良い。

ペルーの双子の兄弟も、ここにきて、英語を勉強したくなって、子どもたちから遊びながら習っているけど、日本に帰ったらがんばって飛び職人として働いて、次回はさらに長期滞在しながら英語学習をする予定だ。

慰霊碑のまえで、今回の訪問者

カラパニットの子供たちに古着をわたした

タモガンにいき、日本語を話すおばあさんに会った。

ダバオからまず、山本さま御兄弟のおじさまが戦死されたという、タモガンに向かった。

タモガンには、流ちょうに日本語をしゃべる日系人のおじいさんがいらしたけれど、残念なことに亡くなられていた。しかし、まだおばあさんがご存命で、ご主人ほどではないものの日本語をお話になられる。

お二人とも日系人で、お父さんが日本人、お母さんがバゴボ族で、マニラ麻の仕事をされていたけれど、戦争の時にタモガンに逃げて、山奥をさまよったという。

ご主人は、心から平和をのぞんで、創価学会の会員になられ、その後、タモガンに住まわれて、平和の慰霊碑をつくられた。

奥様のお話をうかがったあと、慰霊碑で拝み、その後、カリナンの日系人会の資料館に寄り、ミンタルの日本人墓地をたずねた。ここは、今年の8月に、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちと日系人会の人々が、いっしょに平和の祈りをしたところだ。

そのあと、皆でアラカンの山に入っていった。

山道を登り、ミンダナオ子ども図書館の宿泊施設のあるラナコランに着くと、下宿小屋の子たちが、大喜びで迎えてくれた。

ここで、スタッフで日系人のジケロ君から、日系人の苦労話を聞き、その後、宿泊施設にいる奨学生たちといっしょに昼食をとり、素晴らしい高原の眺めの中をキアタウ村に向かった。

途中のカラパニット村では、下宿小屋の子どもたちが、村の子たちに、日本から持ってきた古着をくばった。小さな貧しい村で、今年保育所を建設した村だ。

そぼくだけど、うっめーー！

そのあと、キアタウ村に着き、双子兄弟と女性が、ここに2泊することになった。電気もないランプだけのマノボ族の村。しかし、子どもたちがたくさんいて、本当に可愛らしい。

ぼくは、山本さん御兄弟とMCLに向かったけれど、残った若者たちは、地元の子どもたちと遊び、翌日の土曜日には、40分ほど山の斜面を歩いて草原を下り、下の川に子どもたちと遊びにいった。

そこには、大きな洞窟があり、まだ調査のされていない巨大な鍾乳洞もある。

いっしょに行った子どもたちは、お化けが出ると言ってなかなか奥まで入ろうとしない。

この洞窟には、敗戦で逃げた日本兵がたくさん隠れていたのだという。この一帯は激戦地の一つだったのだ。

地元の子どもたちと訪問者の友情をかもす姿を見て、戦死した兵士の霊たちも、心から癒やされたことだろう。図書館で、子どもたちの歓迎を受けたお兄様の山本博樹さまは、涙を流しながらおっしゃった。

「わたしの叔父の霊が、私たちをここに導いてくれたのだと、思います。」

キアタウの村から子供たちと

こんな楽しい体験は、ぼくはじめて！

キアタウ村より ／高田真奈実＞

ゆとり世代、東京のシェアハウス住まい、旅好き…そんな27歳の私がいかにも興味のわきそうな村がキアタウだ。電気、水道の設備はなく、ほぼ自給自足で約200人が暮らしている。ここにもMCLの奨学生がいるようだ。

悪路を行くこと数時間。しばらく遊園地は遠慮したい位、揺れに揺れるデコボコ道を舌を噛みながら進むと、素晴らしい景色が飛び込んでくる。東京での生活とは真逆だ。何も無い。自然がある。人々はここでどんな生活をしているのだろう。ここでは村の詳細というよりも、私が感じたことをシェアできれば幸いだ。

日本軍が隠れた洞窟の中へ

さて、旅をしていれば良い思い出ばかりではない。日本人と聞けば騙そうとしてくる人、すぐに結婚してくれという人、日本嫌いだという人…。民族間のハードル、人と人との垣根というのは何が作り出すのだろう。

ナルシシズムが高く、私とあなたはこれこれの点で違う、私の方が優れているというような気持ちを芽生えさせる文化が、壁を作り出しているのではないだろうか。

そういう意味では、キアタウは非常に壁が低く、良い意味でナルシシズム

ここにいると、心が癒されていく

自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。
郵便振替口座番号　00100　0　18057
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

とはかけ離れている。他人も自分も同じくらい大切にするし、自分がどう思われているかは懸念事項のリストに入っていない。人間くさくて素朴でとっても素敵だ。笑顔でわかる。

そう感じるのはありのままの自分でいられることが、日本では少ないからかもしれない。周りにこう思われたいということばかり気にしている…ことにすら気づかないくらいに。

子どもは子どもらしいが、子どもも家事をしっかりこなして大人に見える時がある。大人も子どものように遊び、子どものような笑顔を浮かべる。そういえば、日本では子どもみたいに無邪気な笑顔を浮かべる大人は少ないかもしれない。あなたはどうだろうか。

ペルー生まれの日本人、双子の兄弟

夜、「電気がないということは…」と期待して見上げた空は、叫ばずにはいられないくらいの星空だった。こぼれんばかりに瞬く星に混じって、ときおり蛍が飛んでいく。恋人が横にいれば、勢い余ってプロポーズしてしまいそうな程の美しさだ。

村人は私が空を見てはワーとかホーとか言っているのを「空がどうしたの」と不思議そうに見ていた。つくづく「普通」とは怖いものだと思う。この星空が常ならば、なんてことのないものなのだ。（もちろんここ以外知らないという事情はあるが）どんなに素敵な宝石を手に入れようとも、最高のパートナーと結ばれようとも、その素晴らしさは徐々に色あせて見えてしまうのが人の弱さだ。自分の幸運を自覚できるのは一種の強さだと思う。強い人になりたい、と流れる星に誓った夜だった。

バナナの葉の上におかれた昼食

ところで、大学へ行く為に借りた奨学金を返したくない、学ぶのに何故お金がかかるのか、と訴える人達の記事を読んだことがある。（日本人の話だ）私もゆとり世代だが、いかにも「ゆとりっぽい」考えだと思ってしまう。彼らにとって、教育とは与えられるものであり、サービスなのだ。

笑顔笑顔笑顔

この村には努力以前の問題で、学校に通えない子どもたちが沢山いるし、少し前までは村から学校に行くのに朝4時に家を出発していたらしい。日本の若者よ、私たちはまだまだ頑張る余地がありそうだぞ。

豊かさは「選択肢がある」ことだとキアタウに来て思った。いくつか道があり、どれも選ぶことができる。努力して何かになっても良いし、のんびり生活しても良い。

先ず私たちは世界の様々な状況を自分の肌で感じ、自分は不足なく、満たされていると感謝できる賢さが求められているのかもしれない。

建設中の保育所のペンキ塗りも手伝った

講演会、報告会、家庭集会の以来は、松居友へ

mcltomo@yahoo.co.jp（松居友へメール）
電話番号：080-4423-2998（日本国内から現地に転送・松居友）
09219603640（現地携帯電話フィリピン使用・松居友）

まだ支援者のいない子たちです。よろしくお願いします。

四

Mechel Sulayman
高校１年・１９９８年生
マノボ族・クリスチャン
両親はいるが生活は厳しい
学校が家から非常に遠い

三

Madelyn L. Dacay
高校１年・２０００年生
マノボ族・クリスチャン
両親はいるが、
父はほとんど戻らない

二

Dianne L. Calibay
高校３年・２０００年生
マノボ族・クリスチャン
成績はよいが
父は日雇いで時々食糧がない

一

Wendrel G. Sagucom
小学３年・2006年生
イロンゴ族・カトリック
父親が殺され、
母親は再婚したため、
祖母と暮らす

八

Jessibel B. Tula
高校３年・１９９９年生
マノボ族・クリスチャン
貧しい家庭
ソーシャルワーカー希望

七

Felix Jr. B. Pableo
高校１年・２０００年生
セブアノ族・カトリック
将来はエンジニアになりたい

六

Hasmin M. Endil
高校３年・１９９８年生
マギンダナオ族・イスラム
両親はいるが貧しい
大学に行って先生になりたい

五

Ebrahim Katol
高校３年・１９９７年生
マギンダナオ族・イスラム
ヘアリップ
１０人兄弟の５番目

十二

Michelle Robito
大学１年・１９９６年生
マノボ族
看護師になりたい

十一

Norsalin Sapaludin
大学１年・１９９８年生
マギンダナオ族・イスラム
戦闘が絶えなかった
湿原地域の出身

十

Trisha Karl Rellon
大学１年・１９９９年生
セブアノ族・クリスチャン
両親は死別
学費をまかなえない

九

Jonard Ventolero
大学１年・１９９６年生
イスラム
クリスチャン地域の
イスラム教徒

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、
メール mclmindanao@gmail.com（日本人現地スタッフ、宮木梓〈あずさ〉に！
Ｆａｘ 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）
振込用紙に、支援したい子の名前を書いて
一部振り込んでいただければ、こちらからご連絡いたします。
郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

野菜売りの少女（連載童話）

松居友

ミンダナオ子ども図書館の子どもたち

子どもたちの中には、車イスにすわっている子もいる。

みんなとっても明るくて楽しそう。

一人の子が、ギンギンにちかよるといった。

「わたしも、父さんいないんだ。生きているんだけど、どっかにいっちゃったまま、帰ってこない。母さんも、別の人といっしょになったみたい。」

「ぼくのお父さんは、戦争で死んだ。家族で家にいたら、とつぜん鉄砲の弾がとんできて、お母さんも兄さんも弟も死んで、ぼくと妹だけが生き残った。

死体を埋めるひまがなくって、ワニのいる川に流したんだ。」

「わたしには、母さんがいない。病気で死んだの。

父さんは、町に出稼ぎにいって何ヶ月ももどらないし、子どもたち5人だけで、山の家にとりのこされていたの。

近所の人たちが、食べ物くれたりしたけど、何日も食べ物がなかったり・・・。」

「わたしねえ、父さんも母さんも、いるんだけど。町外れのゴミ捨て場にすんでいたの。

母さんは、いろんな男の人といっしょになって・・・お腹がすきすぎると、頭がおかしくなるんだって。」

子どもたちは、ギンギンやクリスティンやジョイジョイを取り囲むと、いろいろな身の上話をかたりはじめた。聞くと、ビックリするような話ばかりだけれど、べつに隠しだてすることもなく、心を開いて　話しかけてくる。

どんなことがあっても、だれも死にたいと思わない。みんな、あかるく生きている。

浮浪者がいった。

「生きる力というのは、一人がんばることじゃなくって、心を開いておたがいに愛しあい、助けあうことなんだ。

大切なのは、たとえ家族がいなくなって一人取り残されても、村のだれかが、めんどうを見ようとしてくれるような、人と人との温かい心のつながり。兄弟姉妹どうし、子どもたちどうし、心をかよわせ、助けあって生きようとする思いやり。

それが、死んだりしないで、生きて行きたいと思う力に変わっていくのさ。」

子どもたちは、口をそろえて、いった。

「ミンダナオ子ども図書館もそんなところだよ。」

「ぼく、ここに来て、よかった。」

「友だちが増えて幸せ。」

「それに、大学まで行けるんだ。」

「ぼくは、先生になる。」

「わたしは、看護婦。」

「エンジニア。」

それを見て、クリスティンがいった。

「わたし、ここにすみたいなあ。」

「住みなよ」スイーツがいった。

すると、アオコイ酋長は、いった。

「でも、まずはお母さんに、相談しなくてはね。君たちの家をたずねて、お母さんと話そう。」

そして、浮浪者のほうを向くといった。

「ご同行、お願いできますか。」

「もちろんですとも。」

さっそく、アオコイ酋長は、置いてあったピックアップトラックの運転台にすわると、エンジンをかけた。奥さんと浮浪者と山菜売りの少女たちがのった。

酋長は、ストリートチルドレンたちにも声をかけた。

「君たちも、いっしょに来てくれないか？荷台にのったらいいよ。」

「わーーーい。」

7人のストリートチルドレンたちは、歓声をあげると、ピックアップの荷台に飛びのった。

ピックアップは、エンジンをふかして出発した。

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、おおぜい手をふって見送った。

荷台から、ストリートチルドレンたちが手をふりかえした。

ばあちゃん

車は森の道を走りつづけ、急な山道を登りつめて、ふみあと道の前でとまった。

そこから、みんなで歩いてゴムの林をぬけ、ギンギンたちがカブトムシと出会った大木のある森をぬけていくと、谷間に出た。下を流れている川の向こう側の斜面に、ほたって小屋が見えた。

「あそこよ。」

ジョイジョイがさけぶと、少女たちは、ウサギのように素早く森を走りぬけ、川をわたった。そのあとを7人の男の子たちが、負けじと猿のようにはねながらかけていく。

浮浪者は、岩のあいだをスイスイと歩いて行くけれども、アオコイ酋長と

奥さんのエープリルリンは、その後を滑らないように用心しながらついていくのがやっとだった。
家に着くと、だれよりも先にむかえに出たのは、ばあちゃんだった。ばあちゃんは、杖をつきながら、興奮したようすで浮浪者にちかよると手をにぎりしめた。まるでずっと以前から、親しかったように。
「よう、来てくださった。ほんとうに、よう、来てくださった。」
家の中から、母さんとインダイ姉ちゃんが出てきた。
浮浪者は、じっと母さんをみつめた。
母さんは、たくさんの訪問者をみて、少し驚いたようすだった。
ギンギンは、母さんのもとにかけよるといった。
「おきゃくさんよ。ミンダナオ子ども図書館のアオコイ酋長。
わたしたちを、学校に行かせてくれるって！」
母さんは、おくれてやって来たアオコイ酋長と奥さんをみとめると、興奮したようすで歩みよっていった。
「存じています。存じていますよ。
MCLの酋長さんでしょう。
学校に行かせてくださるって、本当ですか！
うちの娘をお願いできたらどんなに良いかって、前からわたし・・・」
そう言ったきり、母さんは、言葉につまってしまった。
姉ちゃんのインダイがいった。
「あなたたち、学校に行きなさい。ミンダナオ子ども図書館に住んだらいいよ。わたしは、家に残って、母さんをてつだうから。」
ギンギンがこたえた。
「学校が休みの日には、わたしも帰って、山菜売りのお手伝いするね。」
ばあちゃんも大喜びでいった。
「よかった、よかった。これで、いつでも安心して、あの世に行けるというもんじゃ。それにしても、一つ気がかりなのは、十四歳で結婚して、山に住んでいる長女のことじゃが・・・。」
ギンギンがハッとしていった。
「わたし、姉ちゃんにあったよ。」
「わたしも。」
「わたしもよ。」
クリスティンとジョイジョイがいった。
アオコイ酋長がたずねた。
「長女の方は、どこの村に住んでいるんですか？」
「アポイアポイです。」
「えっ！」
酋長は、いっしゅん絶句するといった。
「それは大変だ。
あそこで、戦闘が始まったっていう、情報が入っている。」
「そうよ。森で、鉄砲の音がしたもん。」
ジョイジョイがいった。
「なんで、そんなことわかるの。」
母さんが、いった。
ギンギンたちは、だまってしまった。
アオコイ酋長がいった。
「アポイアポイの人たちは、下のボアイボアイ村に緊急避難したと聞いています。しかし、住む家も食べるものもない。着の身着のまま、大あわてで逃げてきたようだ。」
それを聞いて母さんが、泣きだしそうな顔をしていった。
「娘も赤ちゃんも、外で寝ているのね。
雨がふったりしたら大変。」
動揺している母さんのようすを見て、酋長の奥さんがくちをはさんだ。
「お母さん、おばあさん、安心してください。
実は、明日、わたしたちは、子どもたちといっしょに、ボアイボアイに逃げてきた人たちを助けに行く予定なんです。雨よけのビニールシートと炊き出し、そして古着の支援です。」
浮浪者は、自分もすでに知っていたかのような顔をして、大きくうなずいた。
アオコイ酋長は、ギンギンたちのほうを見ていった。
「君たちも明日、いっしょに行ってくれないか？
姉さんに会えるだろうし、君たちがいっしょなら、わたしたちも心強い。」
母さんとばあちゃんは、ちょっと安心していった。
「どうか、姉ちゃんと家族を、守ってやってください。
お願いします。」
母さんが、ギンギンたちにいった。
「あなたたち、明日から、ミンダナオ子ども図書館に住みなさい。」

つづく

テレビで放映された『なぜここに日本人』
ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。
「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm から、
映像サイトに。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても治せないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付

直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には年４回、１、４、７、１０月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。支援者がまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費、医療費、生活費（MCL は、孤児施設としての許可も得て活動しています）。MCL や宿舎に住んでいる、子どもたちの食費や生活費、ほぼ２５０名。奨学生以外の子どもたちの医療費。戦争の時の緊急支援費。そして読み聞かせに行った場所で、絵本の無い子どもたちに無償で届ける絵本の制作などに使われます。季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

２，植林環境支援・・・６万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

３、保育所・下宿小屋建設支援・・・５０万円（簡易保育所）８０万円（スタンダードまたは総セメント製）

振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年４回季刊誌と同時に毎年１０月号には、現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。数年ごとに修復。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障。経費には、食費医療費、制服学用品、小遣い、寮下宿代、生活費が入っています。

１，大学生スカラシップ・・年額７００００円（月額５８３３円）

（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）

２，高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、毎回本人からの手紙（英語）、７月に成績表、１０月に写真、１月に新年カードが届きます。新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円（月額３３３３円）

振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌と特別号に同封して、７月に写真、１月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。訪問の際は自宅にご案内します。
プレゼントも可能ですが、僻地のため、返事は半年ほど後になる可能性があります。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/ ～ mindanao/mindanews.htm

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、

メール mclmindanao@gmail.com（日本人現地スタッフ、宮木梓〈あずさ〉mcl.v.staff@gmail.com も OK）
Fax 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）
メール：mcltomo@yahoo.co.jp 電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines